

# 小果樹類について



田村 勉

大玉ゲースベリー

共その発展が注目されている。

次にわが国で従来小果樹類の栽培が奮わぬのは気候風土に恵まれて他の優れた果樹の種類が多くしかも優品を産する事、及び果実を原料とした園芸加工面の不振がその主な理由であると思う。しかしわれわれの日常生活について実状を検討してみると、成程立派な果実が四季を通じて店頭に並んではいるが価格の点でそう易々と口に入るという迄には至っていない。換言すると現状では庶民のものとして親しまれるには程速く嗜好品、贅沢品として高嶺の花的存在である。さればといつて量産と価格の引下げを行うにしても適地の問題、或は病害虫防除費等の関係から生産費を軽減する事も口でいう程簡単な問題ではない。

以上のように考えて見ると土地を選ばず、結果が早く、栽培が簡単に家庭用果樹としても容易に受入れ得るものとして小果樹類を取上げ度いのである。殊に北海道は他府県に比し気候の関係で果樹の種類も少く、又既存果樹の栽培不可能な泥炭地、火山灰地等が多く果実に対する縁がうすい。この点本道こそ小果樹類の為に残された天与の地と云い得るのであつて、道北或は道東の根釧地帯等に導入するならば、栄養の見地から食生活改善を通じて農村文化向上の面にも今後大いに貢献出来るものと期待して止まない。前置が長くなつたが次に代表的二二三の種類について簡単に記し御参考に供したいと思う。

## 一 須具利 (ゲースベリー)

わが国にも古来から原生する須具利の種類

類はあるが栽培の価値は少なく現在作られているものは明治に入つてから輸入された次の二種である。

1 大須具利 (大玉ゲースベリー又は独逸ゲースベリー) 歐洲原産で後者に比し枝が大きく、刺が著しい。果形は一般に長円形で果面に毛が多く、本道に現在ある品種はその名称が判然としないが成熟して濃紅色に着色するものと、成熟しても殆ど着色せず濃緑黄色を呈する二系統が見受けられる。性質は後者に比し弱く特にウドンコ病に犯され易いが、酸味少く、甘味に富み特殊の芳香を有し、品質上等である。病害に対する抵抗力に欠けてはいるが、種々の薬剤が進歩した今日栽培は専ら本種に限らるべきものであり、本種の改良によつて優良品種の出現が期待される。

## 2 アメリカ須具利 (小玉ゲースベリー)

果実は小形で円形、果面に毛がなく、成熟すれば紫紅色に着色する。性質強健で豊産ではあるが、前者に比し一般に酸味強く、甘味が少く品質が劣る。

## 二 総須具利 (カーラント)

このものは歐洲原産で基本種として三種上げられているが、現在栽培されているのはその中の二種に含まれる様である。

### 1 赤色及び白色種

これは一つの基本種から出たもので、わが国で作られているのは殆どこの種と見て良く、他の種類に比し一般に大粒で味も優れている。今日見られる品種の殆どは熟期になると赤く着色するが、筆者の見るところでは成熟しても着色することなく黄白色透明な感じになる品

園芸学的に小果類と云う言葉が使われているが、これは米国の言葉をそのまま翻譯したものであつて或限定した果樹名を指すものではなく極めて総称的な名称である。

従つて欧米に於ても之を取上げる人によつてまちまちで樹莓類 (きいちごるい) 須具利 (すぐり) 総須具利 (ふさすぐり) 越橘類 (こけももるい) 胡頹子 (ぐみ) 等は勿論、日本では蔬菜として取扱われる草苺が必ずこの中に取入れられ、更に葡萄をも此の部類に入れて論ぜられる場合がある。

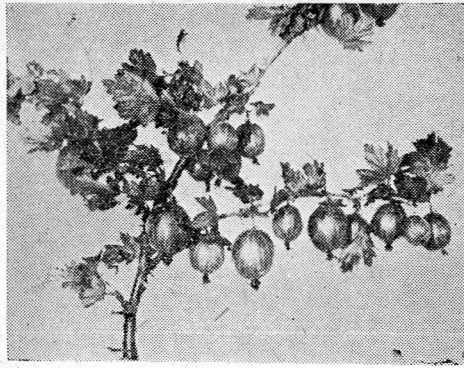
元来果樹は喬木性果樹、灌木性果樹、及び蔓性果樹に大別されるが、この中灌木性果樹に入れらるべきものは総て小果類として取扱つてよいものと考えられる。従つて

わが国の場合は前記種類中草苺は蔬菜として扱われるから問題はなく、又葡萄は当然蔓性果樹の中に入れられるべきものであるからこの二者を限り、古来から家庭果樹として分布している「にわうめ」「こうめ」の類を含めた小形果樹の総称であると解釈してむしろ小果樹類と名付けるのが適當であると思う。

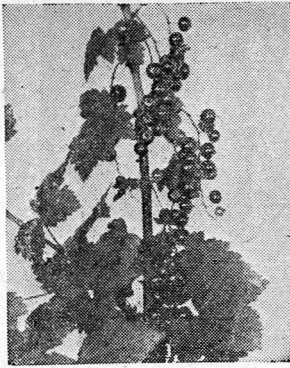
諸外国においても小果樹類の改良が行われ果樹としての栽培が旺んになつたのは比較的近年の様である。現在栽培面積から見ても發達の著しいのは米国であるが、英国、独逸等でも中々旺んなものがあるが、家庭果樹として生食は勿論ジャム、果汁、ゼリー等の優秀な加工原料として取上げられ将来

種が生食用としては優れている様に思われる。

2 黒色種 主として歐洲北部にその栽培が認められる様であつて熟期に至れば黒く着色し、果形は楕円形である。前者に比



大玉ゲースベリー

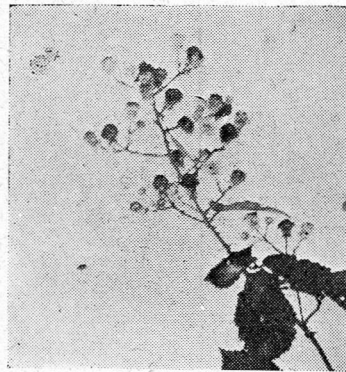


カーランツ

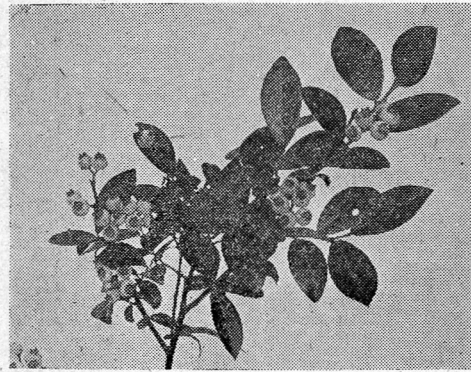
し発育は良好であるが、果実に独特の臭気があるので、生食用としては日本人の嗜好に適さぬ様に思われる。但し加工用としては諸外国の例を見てもむしろ前者に勝るもの様である。

三 樹莓(木莓)類

樹莓類はわが国の山野にも多数自生し七〇種以上にも達することである。世界各地に分布する数百の種類を植物学者はこれを七種に大別しているが、今日改良が加えられ栽培的価値ありと認められるものはその中の二種に包含される。



木 莓



木莓ブルーベリー

樹母類の果実は良く観察すると一個宛の種子を含む小さな果実が花托を中心にして集団をなしているものであつて、これを聚

合果と名付けているが、この二種間には果実が成熟して果梗部から脱落する際次の様に明かな相異が認められる。説明の都合上仮に栽培Aと栽培Bに区別して解説することにす。

1 栽培種A わが国で一般に「せいようきいちご」と云われるものはこれに入り本邦各地に野生するものでこの種類に入るものが多い。

本種の共通性の特徴として果実が成熟期に達して果梗部(花盤といつてゐる)から分離する際花托を果梗部に残し、従つて聚合果の内側が空洞になり帽子状になつて離脱する点である。従つて収穫後聚合果の小果実一個一個がばらばらに分離し易い。

2 栽培種B 本種に入るものは殆どが米國東部原産のもので主として北米において改良が加えられ近年多数の品種が作られている。この種類に属するものの特性として果実が成熟後果梗部から離れる際花托を着けたまま分離するので、収穫果は前者の如く中空になつて帽子状を呈することなく落口が平である。又花托そのものも柔軟多漿である。図1参照

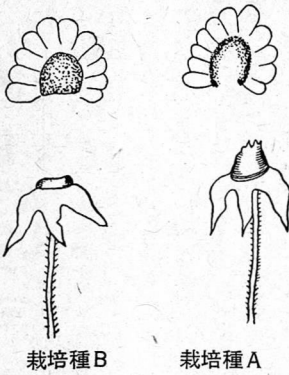
栽培について

須具利及び総須具利 両者共低温に対する抵抗力が強く、夏季の高温乾燥を嫌うので北海道、東北地方等はその適作地ということが出来る。土壤は表土の深い墾壤土を最適地とするが、有機質を補給して乾燥を防ぐならば余り土地を選ぶことなく大概の土地に栽培することが出来適応性は広い。りんご、なし、ぶどう等の新植園に間作として用いるのも一方法であらう。

繁殖法は簡単で本数の少ない場合は株分、取木等で十分間に合うが、一時に多数増殖せんとする場合は挿木法を用いるがよい。栽植距離は栽培地、仕立法等によつて多少異なるが畦間六尺、株間五〜六尺位が適当であらう。定植に當つては他の果樹同様植穴は可能な範囲で大きくし有機質を施すことを忘れてはならない。

仕立法は結果の習性を良く考えて行わねば成果が上らない。即ちこれらの果樹は前年伸びた枝の葉腋(枝と葉の間)に花芽が作られていて本年開花結実するものであるから、剪定する場合ス様な枝(結果枝)を大切に取扱わねばならぬ。更に二年枝よりも古い枝(三年以前に伸びた枝)には結果枝が着き難いばかりでなく、例え結実しても果実が小さく品質が劣るから剪定に當つては余り古い枝を多く残さぬ様常に更新して行くことを忘れてはならない。

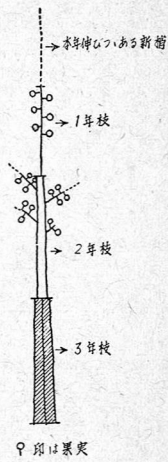
図1 樹莓の果実模式図



栽培種A 果実の芯部がぬけて空洞になる。  
栽培種B 収穫の際果の芯部がぬけてない。

又地下より新梢を多数発生するがこれを多く立て過ぎると大株になつて病害虫の発生が多くなりこれが防

図2 結果習性  
模式図  
(須具利、総須具利)



繁殖法は専ら株分法によるものであるが、取木法も又可能で特にこの類の特徴として先取法と称し新梢の先端に土を掛けて置くと簡単に発根する性質を持つており、その先端は生長を継続するから秋迄には完全に苗として使用することが出来る。

結果習性は前年発生した茎(一年枝)の葉腋から新梢を発生しその先端部に多数の花を着生する。

斯くして前年発生した一年枝即ち葡萄の種蔓に相当する部分は開花結実して収穫が終れば段々衰弱して翌春迄に枯死し、自然状態に放置しても年々新梢によつて更新される訳である。従つて収穫の終つた一年枝をそのまま放置すると、その年伸びつつか、翌年の為には大切な新梢が抑制されて充実出来ぬ場合があるから、適当に剪定し整理して置かねばならぬ。

仕立法も種々考えられる。種類によつても異なり又栽培する地方により一様にはいわれぬが、米国の例等から見て新梢を四〜五本立てて畦幅六尺、株間五〜六尺位が適当ではなからうか。

その他の小果樹類として将来期待されるものにブルーベリー、越橘の類がある。これ等は低温に対し強いばかりでなく乾燥には弱いが、湿地と、酸性地をむしろ好んで良好な生育をするものであるから将来果実に恵まれぬ泥炭地帯、或は海霧の影響で他の果樹栽培に不向な根拠地方に取り入れて有望な種類であると思う。

(北大農学部、助教授)

# 花木二つ三つ

原 秀 雄

本誌の四月号にマンサク、コブシ、サンシュユについていささか拙文を綴つたが、機を得てまた二つ三つの花木を選び、駄文を寄せることになつた。

**オオデマリ** またテマリバナ、スイカヅラ科の落葉灌木、本州以南の各地の山野に生ずるヤブデマリ(藪手毬)の変種である。北海道にもこの植物と近縁のカンボク(肝木また櫛木と書く)オオカメノキ(ムシカリ)ガマズミ、ミヤマガマズミの各種が山野に自生する。ヤブデマリもオオデマリも共に寒さに強く、北海道の庭園にもよく植付けられるのを見る。葉はいずれも対生し、枝端に多数の小花を繖房状につける。花は概ね白く、カンボク、オオカメノキ、ヤブデマリいずれも大形の裝飾花をその周囲につけ、その概形はツルアジサイ、ヤマアジサイ、ノリノキ(サビタ)など、好一对であるが、ヤマアジサイなどの一類の裝飾花は、萼の大形に発達したものであるのに反して、ヤブデマリの一族のは花冠であるという違いがある。然しガマズミ、ミヤマガマズミには裝飾花がない。さてオオデマリは花序が裝飾花のみから成り、その様はアジサイの花と似ている。木の高さは三米にも達し、これに雪の玉のような丸い花の塊を団々と緑の葉の間にのぞかせた様は、確かに一偉観である。オオデマリ

は培養品であるが、何時頃から栽植され、どこでできたかは不明である。わが国で生れたことは確かのように、天和四(一六八四)年の立華訓蒙図彙はオオデマリの名の出た古い文献である。倭漢三才図会には粉団花、テマリ、綉毬、繡毬、玉繡花、天末利の名があり、『按ずるに粉団花は木の高さ五、七尺葉箱根楊楯(ウツギ)に似て団々繡文あり四月花を開く。初は淡青色後に正白小枝花攢簇て団さ二三寸毬(テマリ)の如し』とある。

この灌木は挿木で育苗する。春発芽前に五〜八寸位の長さに前年生の枝を切り、日かげにできる所に挿す。他の樹木の挿木と方法は同じである。翌春までそのままおき、発芽前一尺位の株間で床に移植して生育せしめる。甚だ丈夫な木で寒さにも強いので、冬には雪に折られないように竹を添えるだけの冬囲を施せば十分で、成木は枝を縄で束ねておくだけでよい。狭い庭に植付けるのもよいが、広い庭に点々と植付けられ、真白い花をつつた景観は誠に見ごたである。

**アジサイ** ユキノシタ科の灌木で、アヂサキの名は万葉集にすで見え、味狹藍と書き、安治佐為と書く。新撰字鏡には止毛久佐、安知左井、和名抄に阿豆佐為、倭訓

葉に『万葉集に味狭藍にかけける味ははむる詞、狭藍は花の色をいふ也、云々』とあり、また和字正蓋抄に『狭藍はさあるといふべきを、あを略していふ、たゞあるなり、あぢさゐの花は青ければ、かくはなづくるなり。』とあり、また日本釈名に『あつきき也厚くさく花也いときと通ず』とあり、万葉古今動植正名(大正十五年)には『あつまりさく』の中略となし、大言海には

『集真藍(アツサアキ)の約転』となす。いづれにしてもその名のできたのは遠く古代にあり、またわれわれの祖先に古くから親しまれた植物であることに疑いはない。アヂサキは新仮名遣い採用の結果アジサイと書くことになつたが、昔からその漢名として紫陽花を当てている。牧野博士は植物研究雑誌第八巻六号(昭和七年)でその誤りであることを指摘し、天麻裏掛また瑪哩花また洋繡毬が中国におけるアジサイの名であるとした。また八仙花、紫繡毬も誤りである。アジサイはわが国でできた花卉で、その元となつた植物は恐らくはガクアジサイであろうと考えられる。ガクとは額で、花序全体を扁額に見立て、周辺の裝飾花を額縁とした名である。ガクアジサイは暖地海辺の山地に自生し、また庭にも植付けられ、一名ガク、ガクバナ、ガクソウ。

アジサイと近縁の植物には北海道に木の幹などに気根ではりついて昇るツル(蔓)アジサイ(ツルデマリ、ゴトウツル)ヤマ(山)アジサイ(コガク、沢アジサイ)など花序の形が繖房状でガクアジサイに似るものと、ノリウツギ(糊空木、糊ノ木、サビタ)のように円錐状に花のつくものとあるが、

いづれも花序は小粒の正花と、小数の裝飾花とから成り、アジサイは花がすべて裝飾花から成り、ノリウツギにもアジサイのようすべてが裝飾花から成るミナツギがある。またアジサイの類にはアマチャ(稚葉を蒸しほうじて甘茶を作る)ホソバコガク、ベニガクなどもある。アジサイの類の花の色は碧色であるが、時季により変化し、紅や紫のさすものもある。山アジサイの花も同じような色である。白い花をつける蔓アジサイ、糊空木などはもとより、山アジサイ、アジサイなど花の咲きははじめと終りには、裝飾花は緑となり、更に枯れて枯葉色となり枝梢に止まる。

蔓アジサイ、山アジサイ、糊空木はもとより、アマチャも寒さに強いが、アジサイ(ガクアジサイも同様)は寒さにやや弱く、地下の部分は枯れぬが地上の茎は冬の寒さに枯れ易い。それで冬は竹を添えて雪折れを防ぐとともに、薙で巻いて茎の寒枯を防ぐ必要がある。アジサイ類の花は前年の枝から出た新枝に着くから、毎年枝を枯らしていたのでは花を見れないこととなるので、今年地下から発生した枝は、寒さで枯らさぬことが大切である。またアジサイは軽い日かげと水湿にこと欠かぬことが必要で、貝原益軒の花譜に『赤土を好む暑を恐る夏日は水をしばしばそそぐべし陰地にはよろしからず』『春のはじめ或は八、九月わかちうふべし又さしてもつく』とある。育苗は春、発芽前に株分を行うか、または発芽前の枝を五寸位に切り、少しく日かげで湿りのある土地に、全長の半位挿し、翌春植付け、或は新枝の先三、四寸を採り、枝端

の葉はそのままに、下の葉はこれを除いて川砂、火山砂、鹿沼土などに挿し、根づいたものを鉢または床に植付けることにより行う。アジサイ属植物はいづれも日陰に堪えるが、余り強い日陰では、生育はするが花を咲かぬことが多いから、ある程度日光に当てるべきである日当りが余り強いと日中葉がたれ凋むことがある。花のつく芽は前年生の枝の頂芽またはこれに近い数芽にすぎぬから、春枝を余り深く剪ると、枝を枯らしたと同様花をつけぬことが多い。庭に植付けたものには特に施肥の要はないが、それでも堆肥に油粕、米糠などをまぜて施すとよく、また落葉や腐葉土、堆肥、或は枯草などを初夏地面に敷き、秋これを鋤き込むようにすると更によい。鉄屑や明礬を与えるとなを藍色にするというが、土壌の酸度によりこの花の色が著しく変化することは事実である。アジサイは欧米に渡つて欧米流に改良され、再び本邦に輸入されたが、これを花戸ではハイドランジアと呼んでいる。これはアジサイ属のラテン名ヒドラングア(Hydrangea)の英語よみである。逆輸入品には色の華美なものが多い。

ウツギ ユキノシタ科の落葉灌木。本草和名には宇都岐、新撰字鏡に宇豆木。古くから伝わる名である。後ウノハナ(卵ノ花)の名を見るようになったが、これは初めウツギの花をよんだ名であり、漸くウツギの一名として用いられるに至つた。わが国至る所に自生し、また古くから庭園に植付けられる。万葉、古今などわが古い歌集に載せられる和歌も多い。万葉にも卵の花の名

を用いられる所より見ると、卵の花という言葉もかなり古い名ともいえる。また古歌にはこの他夏雪草、雪見草、初見草、塩見草の別名が用いられているが、花譜にはウツギの一名として、重訂本草綱目啓蒙にはタニウツギとしている。その正非は別として楊柳はウツギの漢名ではない。またウツギは空木で国史昆虫草木攷に『ウツギといへるはこの木には穂ありて心は虚になれるものなれば』とあり、和漢三才図会には楊柳に『和名宇豆木、疏通也、中空にして能く通ず故に名とす、卵花と云ふは宇豆木の花の略也、寅卵の卵に非ず』とあり又『按ずるに楊柳に数種有り山空木、箱根空木、唐空木、三葉空木共山中に之有り、人籬垣に植るは山空木、箱根空木也、皆中空なり、故に空虚木と名づく。凡そ之を挿せば能活く、但し樹に刺無く、又赤き子を結ぶ者無し』とあり、山空木、箱根空木、唐空木、三葉空木の各種の解説を記してあつて、山宇豆木の項に『俗に卵之花と云は是也』とある。ウツギは高さ九尺位となり、枝は地下から發生する。新枝は長大に生長し、葉は対生、卵状披針形で鋸齒があり粗である。花は弁白く五片、円錐状に着く。札幌の花季は六月末より七月上旬頃である。八重の花を開くものもある。

植付け後の手入れは別という程のことはなく春先古い枝を剪つて枝透しをする位でよい。育苗は春、発葉前枝を五、七寸に切り、土中に長さの半分位挿し、翌春植出す。枝を刈込んでよく花をつけるので、生垣にしてもよく花をつける。(北大植物園主任)